

古文 詩歌

折々のうた

万葉集

大岡 信



講師

畠山 俊

理解を深めるために

■学習のねらい■

昔栄えた都を懐かしく思う歌や春の美しい景色を詠んだ歌を読み味わい、あわせて「万葉集」という歌集への理解を深める。

* * *

うたに詠まれた懐旧の情を読み味わう

●古い時代の国名（おおよそ県の単位の昔の呼び名……必ずしも厳密に対応しているわけではないまた、読み方は現代仮名遣いによる）

- 豊後（ぶんご）……大分県
- 武蔵（むさし）……東京都、埼玉県、神奈川県の一部
- 出雲（いずも）……島根県の一部
- 伊勢（いせ）……三重県
- 近江（おうみ）……滋賀県

●注意する語句

- 淡海……「湖」 参照・潮海「海」
- 淡海の海……「琵琶湖」
- 夕波千鳥……柿本人麻呂かきふひとまろの造語。「夕波に遊ぶ千鳥」
- 汝……「あなた、お前」
- 思ほゆ……「思われる」

■読解のポイント

- ば 未然形接続 仮定を表す 「ば」
- 已然形接続 順接の確定条件を表す 「ので、と」
- 鳴け（カ行四段已然形）+ば 「鳴くと」
- 古（いにしへ）とはいつのことでしょうか。

西暦六六七年に天智天皇は都を大津に移しました。しかし、天智天皇の死後、弟の大海人皇子と子の大友皇子が後を争い、大海人皇子が勝利すると（壬申の乱）五年あまりで都はふたたび飛鳥地方に戻ることになりました。その五年間の大津京の栄華の様がこの「古」で、柿本人麻呂が訪れたころには見る影もなく荒廃していたと考えられるのです。

「万葉集」について知る

■「万葉集」

現存最古で、もつとも多くの歌を収めた歌集。

- ・二十卷。四千五百首。
- ・最終的な編集は大伴家持が行い、奈良時代後期には現存の形となった。
- ・表記法は漢字の音と訓とを自在に使い分ける「万葉仮名」。
- ・およそ二百六十首の長歌（五七五七七…五七七七）を含んでいる。
- ・第一期（六七二年 壬申の乱まで）

古い素朴な歌が中心。

- ・第二期（七一〇年 平城遷都まで）

柿本人麻呂ら宮廷歌人が活躍した時期。

- ・第三期（七三三年）

個性的是歌人の時期。

大伴旅人、山上憶良（家族の歌）、山部赤人（叙景歌）

- ・第四期（七五九年）

東歌（東国地方の民謡的な庶民の歌）・防人歌（東国地方から九州へ警備のために遣わされた兵士の歌）を含む。

春の美しさを味わう

苑……………「庭」

下照る……………「下に美しい色が映っている」様子。

●古今異義語

にはふ……………古文では視覚的な美しさをいうこともあります。「輝くように美しい」

■万葉集

淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ

柿本人麻呂

【卷三】

現代語訳

琵琶湖で夕波に遊ぶ千鳥よ。お前が鳴くと心が悲哀でしつとりと濡れて、昔賑やかであった大津の都）のことが自然と思われることだ。

春の苑紅にはふ桃の花下照る道に出で立つ少女

大伴家持

【卷十九】

現代語訳

春の庭で赤く美しく映えて咲いている桃の花。その赤色が照り映えている下の小道に出て来てたたずんでいる少女よ。